

The Original Style of Prince Asaka Residence, in 1933

東京都庭園美術館は、旧朝香宮家の私邸として1933(昭和8)年に建てられた建築物をそのまま展示施設として用いています。現代的な美術館の展示空間は、「ホワイト・キューブ」といわれるように、白あるいはそれに準じたモノトーンの色彩とフラットな壁面で構成された「箱」であることをひとつの前提としており、内部に装飾の類が施されることはまずありません。しかし庭園美術館は、宮家の邸宅として施主の意向を反映した個性的な装飾が数多く存在し、しかもその空間がホワイト・キューブからは得難い豊かな展示効果を生む要因になっているという、日本ではきわめて例外的な環境下にあります。

完全なかたちで現存するのは世界的にも珍しいといわれるこのアール・デコ様式の建築物は、アンリ・ラパンをはじめとする複数のフランス人デザイナーと、権藤要吉ら宮内省内匠寮のスタッフが4年掛かりで取り組んだものですが、彼らの仕事は美術館となった今日においても、文字通り色褪せることなく見事に息づいているのです。



図2. 壁面部分・修復前

図3. 壁面部分・修復後

その旧朝香宮邸時代の意匠を次の世代に伝えていくことは、当館にとってたいへん重要な責務といえるものです。昨年度は、左官工事により外壁全体を竣工当時の色と質感に戻しましたが、本年度は旧大客室の壁面と旧大食堂の壁画(ともに1階)、旧妃殿下居間前の南面バルコニー・タイル(2階)の修復を行いました。

美術館ニュース前号付録「旧朝香宮邸のアー

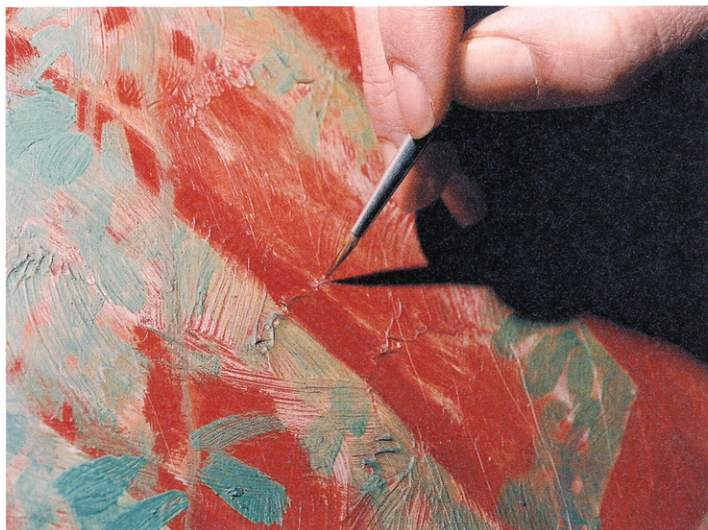


図1. 水彩絵具による補彩作業

ル・デコ」でもお伝えしたように、大客室の壁面は105枚ものシコモール材(欧州産の楓の一種)のパネルによってすべて貼り替えを行い、その結果アール・デコらしい部屋の華やかな雰囲気はそのままに、設計者の意図した硬質で緊張感のある空間が甦りました。同じラパンの手による大食堂の壁画には、およそ70年間に渡って画面に堆積した埃や煤を慎重に洗浄して除去し、損傷部に水彩絵具による補彩を行い(図1)、額縁を取り外し、支持体(板材)の裏面をステンレス枠で補強して壁面にはめ込むなど、徹底した修復処置を施しました(図2、3)。また妃殿下居間前のバルコニーは、劣化した目地を打ち替え、タイルの表面を洗浄したことによって、『朝香宮邸新築工事録』(宮内庁書陵部蔵)の図面上でしか見るのできなかった、凝った構成と輝くような色合いがはっきりと確認できるようになりました(図4)。

当館では今後も館内の計画的な修復を行っていく予定です。現在は3階のウィンター・ガーデンの出来るだけ早い公開を目標に、皆様方には工事費用のご寄付を募っております。ぜひとも修復と公開へのご賛同をいただき、ご協力を賜りますようお願い申し上げます。(中原)



図4. バルコニー・タイル修復後

*写真提供(図1-3):石井亨氏(絵画修復家)

*旧朝香宮邸は、1993(平成5)年に東京都指定有形文化財(建造物)に指定されています。